

二つの箱庭 - 物語

—20年という歳月は作品にどのような変化をもたらしたか—

中垣 ますみ・永尾 彰子・菅 佐和子

Two Sandplay-dramas

-Examining How Compositions Change After 20 Years-

Masumi NAKAGAKI, Akiko NAGAO, Sawako SUGA

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第6号 (2024年1月)

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.6 (January 2024)

二つの箱庭-物語

—20年という歳月は作品にどのような変化をもたらしたか—

中垣ますみ・永尾彰子・菅佐和子

(京都教育大学教職キャリア高度化センター) (木津川市立梅美台小学校) (京都大学名誉教授)

Two Sandplay-dramas

—Examining How Compositions Change After 20 Years—

Masumi NAKAGAKI・Akiko NAGAO・Sawako SUGA

2023年8月30日受理

抄録：Aさんという一人の女性が40歳代前半で作成した箱庭-物語と、その20年後の60歳代前半で作成した箱庭-物語の比較検討を試みた。20年の歳月を経て、箱庭-物語の表現は大きく変わった。一方で2つの作品に共通して変わらないテーマも浮き彫りになり、生き方にかかわる潜在的なテーマであろうと考えられた。また、箱庭-物語の制作によりその時々の中の世界的メッセージに耳を傾け意識化されていくことは、大きな意味があると推察された。

キーワード：箱庭-物語法、20年の歳月と箱庭-物語、作品の変化、内的世界からのメッセージ

I. はじめに

筆者らが行ってきた「箱庭-物語法」(2020, 2022, 2023)は、まず箱庭作品を作った後で、その画像を見ながら空想物語を作るという技法である。箱庭療法は、個人の無意識領域のイメージの世界を砂箱の上に表現する非言語的技法として定評のあるものである。それだけで十分な治療的効果を持つことが知られているのに、そこに、意識化された言語による物語を付け加える意味について、改めて確認しておきたい。

箱庭療法以外に、絵画療法においても、描画の後に物語を付け加える技法が存在している。代表的なものが、山中(1984)によるMSSM (Mutual Scribble Story Making)である。これは「交互ぐるぐる描き物語統合法」と呼ばれるもので、1枚の画用紙の上にクライアントとセラピストが交互にぐるぐる描きを行い、何かの形を見つけて彩色し、最後にクライアントがそれらをまとめてひとつの物語を作る技法である。山中は、その意義について「一たん無意識界からとり出した(投影された)諸々の内容物を、意識の糸で縫い合わせる」(1984)、「投影したものを再び意識の糸でつなぎとめる」(1990)と述べている。

この「意識の糸」の働きについて、老松他(2003)は、クライアントの「安全性の確保」(投影されて出てきた無意識的なものをそのままにすることは危険性を伴う場合があるため意識化によって「縫い合わせて」面接を終える必要がある)と「こころの成長や変容の促進」(無意識由来の諸内容に意識ないし自我が積極的に関与すると、意識の領域の拡大が可能になる。特に、それらの諸内容をひとつの物語として構成するという関与の仕方をする、意識の中での収まり具合が良くなり、次なる展開にもつながりやすくなる)を挙げている。これらは、「箱庭-物語法」にも該当する極めて重要な見解であると言えよう。筆者らも、理論的にはこのような見解に準拠している。

本稿においては、X年とX+20年という20年の歳月を隔てて作成された同一被験者の二つの箱庭-物語を比較検討する。同一被験者の20年を隔てた作品は稀有な例と考えられる。考察においては、まず、20年という歳月が、作品にどのような変化を及ぼしているかを検討する。次に、20年前の箱庭-物語作り(SUGA, 2003)が、被験者にどのような影響を与えたかを言語面接を通して確認し、人生の節目の時期に箱庭-物語を作ることの意義について考えてみたい。

II. 研究の方法

箱庭及び物語の作り手は A さん、X 年当時は 40 歳代前半、X+20 年では 60 歳代前半であった。箱庭及び物語は、X 年、X+20 年ともに隔週で計 6 回ずつ制作した。どちらの時も、すべての終了後にインタビュー（面談）を 1 回実施した。箱庭作りを行った部屋、そこに備えられているアイテム等は、まったく別である。

作り手は自由に箱庭を制作し、完成後にデジタルカメラで撮影した画像を持ち帰って、次回までにその画像を題材にした物語を作成、次の箱庭制作時にその物語を見守り手に渡した。箱庭制作の時間は、各回とも概ね 30 分程度で、インタビューは、約 1 時間であった。

A さんからは、箱庭、物語、インタビューで語られたこと等の掲載の許可を得ている。

III. 作成された箱庭-物語

X 年及び X+20 年に制作された第 1 回から第 6 回の箱庭作品と 2 週間後に手渡された物語、X+20 年のインタビューで語られたことを抜粋して示す。なお、X 年の物語は A さんの承諾を得て日本語の原文を掲載している。

1. X 年の箱庭-物語

(1) 第 1 回の箱庭と物語



図 1 X 年第 1 回箱庭 (SUGA, 2003, p.15)

「悲しい妖怪」

どのくらい歩いたのか見当も付かないくらい、木々の生い茂る道をずっと足元だけを見て歩き続けました。道はグルッと回りながらどこまでもどこまでも続いているように思えました。歩き始めたときはこんな高い山だったなんて思いもしなかったのに・・・つかれた・・・とため息を一つついて顔を上げてみると・・・眼下に思いもかけないような景色が広がっていました・・・そして・・・妖怪の姿になっている自分にも気が付いてしまいました・・・。一体、前の姿はどんなだったのか、そして、他の人にはどんな風に見えていたのか、よくわかりません。とにかく今は、あちこちがごぼごぼとふくれだし、本当にみにくい姿になっている自分が居ることだけがわかっているのです。自分の姿にも思いがけない景色にも、妖怪は息をのんでたちつくしていました・・・そして、何故かだんだんましてくる悲しみに顔を歪めていました。

ずっとずっと向こうにきらきら光るところがあります。海なのか、湖なのか、遥か遠くには水をたたえたところがあるようです。そして、その手前の方に、じっとこちらを見ているものがあるような感じがします。本当に自分をみているのか、別のところをみているのかはつきりわかりませんが、なんだか怖ろしいものが自分をみているような気がするのです・・・自分は今からその怖ろしいものところに行かなければならないのでしょうか。目をこらして遠くを見ているうちに、いろんな物が見えてきました。その怖いお化けの近くには、お菓子のようなかわいい家と、色は似ているのだけれどもおどろおどろしいような屋敷があります。かわいい家の近くにその怖いお化けがいるし、不気味な家の近くには、かわいいベンチと、舞台上で挨拶をするようなポーズをしている女性が居ます。かわいいものの近くに怖いものが、不気味なもの近くにはかわいい女性が居て・・・よく見るとなんだか奇妙にも感じられてきました・・・。その手前の方には、きらきら金色に光る岩が見えます。もう少し左の木々の間には女の子が見えます。女の子は口を押さえています。どうしたのでしょうか。女の子は自分に何かを話してくれるのでしょうか。

光る水辺の方に向かっていくと、何かに会えるのかも知れない。会いに行かなければならないような気がする、けれども足はまだ動かない。近くに黒猫がいることに気付いた妖怪は、こみ上げてくる悲しさに顔を歪めながら、そんな思いがふと心をよぎったのでした。

図 2 X 年第 1 回物語 (Suga, 2003, p.15)

(2) 第2回の箱庭と物語



図3 X年第2回箱庭 (SUGA, 2003, p.16)

「山の音」

(妖怪が)目を閉じると、頭の中はぐるぐると渦を巻いていました。渦巻きの中に大きく捻れた山があることがわかりました。そして、自分はその山の鼓動を聴くように、目を閉じてじっと耳をすませているのです。山裾は大きく渦巻くようにならねって山頂をより高くしています。周囲は冷たい水が取り巻いています。この水の流れはなかなか厳しくその底も深いのです。山頂には水晶の塔があってそこには山の守り神の鷹がまいおりてきています。水晶の塔も珠も静かに澄んだ状態です。しかし、その奥深くでは高熱で真っ赤な珠が息づいていて、目を閉じて耳を澄ましているとその音が聞こえてくるのです。山頂付近は静かにみえるのですがその内には燃えているものがある・・・その鼓動を聴いていると、めまいを感じながらもなんだか落ち着いてくるのでした。

図4 X年第2回物語 (SUGA, 2003, p.16)

(3) 第3回の箱庭と物語



図5 X年第3回箱庭 (SUGA, 2003, p.17)

「水の領分」

火の山の山頂にやっと上り、そこから次にみえたものは水とその周りの世界でした。赤いカエルが私です。湖の向こう側は「青の世界」、静かな領域でした。あちこちの珠の輝きに目をやりはするものの、じっと見つめてしまうのは「青の世界」です。湖を泳いだら行けるかもしれない。しかし、周りにある4つの橋を全部渡ってしまわないと本当の「青の世界」は見えてこないように思われます。でも、4つの橋を渡るとまたもとの場所に戻ってしまいます。船の上の石仏は水をわたるとき守り神のようでもあり、私がする横着を見逃さない存在でもあるように思えます。橋を渡りながらグルッと一回りして、あとは水を泳いでいこうか、そうすれば「青の世界」を見ることができるとも知れないと、そんなことを思っています。蜘蛛がちょっと恐いし、金の石に目がくらんでしまうかも知れません。私にとって危うそうな場所がいくつかありそうですが、向かおうとしているところははっきりしているように思われるのです。

図6 X年第3回物語 (SUGA, 2003, p.16-17)

(4) 第4回の箱庭と物語



図7 X年第4回箱庭 (SUGA, 2003, p.17)

「いよいよ」

深い水の中から上がって、空気を胸にいっぱい吸い込んだ。ヘビに乗って、いよいよ上陸の時を迎えようとしている。向かおうとしているところには、おどろおどろしい家がある。相手方はひっそりしているように見えるが囚われているカラスの近くに戦車が見える。どの程度の攻防戦になるのかわからない。しかし闘いを始めなければならない。闘ってあの家の魔法を解こうとしているのだ。魔法が解けるとどのような世界に見えるのだろうか。闘って打ち破ると思ひこんでいた・・・ふと、勝つとは限らないしそうすると魔法が解けないこともあるかも知れないと思われた・・・こういう考えが浮かんでくるのは、すでに相手の魔法にかかっているのだろうか・・・しかし、闘いは始められなければならない、そう決心した。

図8 X年第4回物語 (SUGA, 2003, p.17)

(5) 第5回の箱庭と物語



図9 X年第5回箱庭 (SUGA, 2003, p.18)

「やれやれ」

やれやれやと抜けて出てきた。

左の世界は一見緑で覆われているけれど、この世界を抜けるのは結構容易ではなく、外からは見えにくい山や潜んでいるいろいろなものに出会っていかなければならない。参ってしまうこともある。今は、やと抜け出てきてやれやれ一息ついたところ。右の世界はずいぶん息がしやすいなあと思う。笑い声も聞かれるし、明るい。暫くはここにしよう。左の世界に二度三度と入っていくのだろうかと、心のどこかで思っている。それまではここでちょっとホッとしよう、でもその時期が来たら入っていこう。ところで、前回の戦いはどうだったんだろうか・勝って森を抜けてきたのだろうか、劣勢のために退却して一旦出てきたのだろうか・。

図10 X年第5回物語 (SUGA, 2003, p.18)

(6) 第6回の箱庭と物語



図11 X年第6回箱庭 (SUGA, 2003, p.19)

「旅」

樹のエリアがあります。根が張るので土は崩れないはずなのに何か不安定なのでテトラポットで止めてあります。車もいっぱいあるし、花が咲いているところもあります・いろいろな年齢のいろいろな表情の人・そしてヘビ・いろいろなものがありますが、どれもこれも懐かしい気持ちがあります。島にも思えるこの地形、ひょっとして塚であるかも知れません。足下は堅くはないですが踏んだ感触は悪くはありません、半球の形をしているのでどこから歩き始めたとしても、終わりはなくずっと回り続けるのです。単調ですが、変哲のないことをこつこつ続けることが日常なのだとも思います。懐かしい気持ちですということ、ここにあるものはみんな自分の中にあるものなのかも知れません。ここにあるいろいろなもの、いろいろなことがまるごと私自身であり、私の歩いている日常なのだと思います。

図12 X年第6回物語 (SUGA, 2003, p.19)

2. X+20年の箱庭-物語

(1) 第1回の箱庭と物語



図13 X+20年第1回箱庭

「私は何？」

「何かが生まれた。生命体かどうか分からない。けれど、何かが生まれてそこにある。土の球の中央にある赤い珠は核心でもあり、これから育っていく赤ん坊のようでもある。まだ中央の深くにじっと秘められている。息づき始めるだろうか、脈打ち始めるだろうか。

そういえば昔々に「豊玉姫が降臨した」という夢を見たことを思い出した。今日生まれたものは何？これから何か起こる？それともこのまま静かに時間が流れていく？

図14 X+20年第1回物語

(2) 第2回の箱庭と物語



図 15 X+20 年第 2 回箱庭

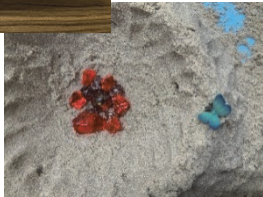


図 16 X+20 年第 2 回物語

「火焰になりたかった私」
 「私の中には炎があるのだろうか。奥底にある赤い核から強い炎が立ち上がる、そんなエネルギーが欲しいと思っていたのかもしれない。私の炎は立ち上がったことがあるのか？そもそも炎があるのか？
 火焰土器のようであることを夢見つつ、私はなんだか丸い、そんなはずはないのに。底に見える赤い溶岩まで可愛く見えてしまう、そんな風に見えることを望んでないのに。その下にマグマが湧いていてほしい、今は感じられないけれど。
 縁にとまっている蝶はいったい何を見ているのだろう

(3) 第3回の箱庭と物語



図 17 X+20 年第 3 回箱庭

「私のなかの水」
 あった・・・私のなかに、水があった。当てもなく触っていた地面だったけれど、指先に水が触れた。ああ、普段は感じるものがなくなってしまっていたけれど、まだ地中には水がある・・・。どんな深さかも、どのくらい湛えられているかわからないけれど、今は、自分の中に水があるということがわかったことだけで自分が満たされていく。よく見ると、あちこちに水が顔を出しているのではないか。傷口にそっと手を当てるように、もう少し、自分にそっと手を当ててみてもいいのかもしれない。そうしたら、自分の中に何かがあることを感じられるかもしれない。捨てたもんじゃない、なんて思うかもしれない。

図 18 X+20 年第 3 回物語

(4) 第4回の箱庭と物語



図 19 X+20 年第 4 回箱庭

「私の小さい臺（うてな）」
 私はなにものなのだろう。私はなにができるのだろう。私はなにになれるのだろう。要領はそれほど悪くない、が、非力であることの自覚はある。しかもメッキのようで補修もつまみ食いだ。私になれるものがあるのか。そんなことを思っていると、ふと脳裏にうかぶのは、ハスの臺。「うてな」という響きが好きだ。花を支えるほどしっかりした夢ではないけれど、高殿を支えるほど堅牢な土台ではないけれど、何かをそっと載せて優しく揺れていることができれば。そんな私になれるだろうか。小さな優しい臺になれるだろうか。

図 20 X+20 年第 4 回物語

(5) 第5回の箱庭と物語



図 21 X+20 年第 5 回物語

「私のなかの混沌」
 イライラする。どうしてこんなに腹が立つのだろう。ちょっとしたことにひっかり怒りが沸き立つ。私が勝手に悪く考えているのだとどこかで分かっている、ほとんどの場合はやっぱり思い過ぎなのだが、発火点が低いというか、簡単に着火してしまう。年齢のせいではなく、自分に異常が生じているかもしれないという怖れもある。苛立つとき、身の内ではあれもこれも巻き込まれ、自分の悪意をテイストにして、ドロドロとした渦巻きが生じているに違いない。わずかにあるちょっと輝くものも、渦の中で翻弄される。周りからも嫌がられるだろうが、自分でも持て余してしまうのだ、こんな怒りは。ドロドロとグルグルと。これは混沌だ。この渦は怖い。そういえば、宇宙も渦巻きだ・混沌は宇宙でもあるのだろうか。とすると、今はこの中に埋もれそうになっている珠も、ふと光をはなつときがくるのだろうか。

図 22 X+20 年第 5 回物語

(6) 第6回の箱庭と物語



図 23 X+20 年第 6 回箱庭

「私は私」
 ふう・・ちょっと落ち着いた。一息ついて視線を上げてみると、水の輝きや木々の美しさが見えてきた。木々が指し示す中心の奥深くに、密やかに花も咲いている。渦巻く激しさもあるけれど守りもある、きっと大丈夫。ここまで来たのだから、私は私って思ってもいいんじゃないのかな。まだまだ周りが気になるけれど、私は私、それでいこう。

図 24 X+20 年第 6 回物語

3. X+20 年のインタビューから

インタビューから(1)~(4)の項目について抜粋して示す。

(1) <20 年ぶりにもう一度、箱庭と物語を作ってみようと思ったのはどうしてか>

20 年前というと、もうすでに若くなかったけれども、まだ「現役感」一杯でどっぷり「渦中」だった。あれから父も母も亡くなり、私自身も定年退職をして、何となく「終わりに近づいている私」を残したいような気持ちがあったように思う。

(2) <20 年前に作った作品について、ずっと記憶していたり、思い出したりするようなことはあったか>

何とんでも「醜い妖怪」が印象に残っている。醜い妖怪の物語で、少女になり、たくさんの蛇もいて、立ち向かっていこうとする物語だったように思う。

ただし、今回再度箱庭・物語法を体験するにあたって、20 年前の箱庭の写真のみたり物語を読み直したりしてみるということはあるしなかった。今回は今回として体験したかったので。

(3) <20 年前に箱庭・物語法を体験したことは、何らかの意味があったらろうか>

体験することで、立ち向かえたかどうかはわからないが、たちむかう「とき」なんだという思い、それは覚悟のようなものかもしれないが、それが心に落ちたようにも思う。

(4) <20 年前と今回を比較して、どのように感じているか>

今回は、砂で遊んだシリーズだったように思われる。備え付けのアイテムの好みも影響していたとは思いますが。

物語もあまり物語らしくなく、気持ちの語りというような感じだった。

それでも、自分自身の内的世界を旅したという感じは結構あって、むしろ若い時より、直接的に内的世界を箱庭や物語で表現したように思われる。結果、今の自分について、結構等身大に捉えて、まあいいか、と認めることもできたように感じている。

IV. 考察

歳月を隔てて A さんという一人の女性によって作られた二つの箱庭-物語について、まず、20 年という歳月が作品にどのような影響を及ぼしているか、次に箱庭-物語づくりが被験者にどのような影響を与えたか、すなわち制作の意義について検討してみたい。

1. 20 年の歳月を経た二つの箱庭-物語の比較検討

X 年と X+20 年の箱庭を比べてみると、用いられているフィギュアの種類や数が大きく異なっている。作成に使われた部屋の違いもあるかもしれないが、X+20 年の箱庭制作にあたっては、砂での表現、砂での造形に没頭する印象であった。両回に共通して用いられていたのは、ガラス玉であり、宝珠のようでもあり地中に埋められることが多いことも共通している。20 年の歳月を経て作られた箱庭ではより直接的に内的世界に入っていく、そこで目を凝らすようにして何かを見つめようとしている自己探索であったように感じられる。

X 年の箱庭や物語において、まず 1 回目では悲しさを抱えた妖怪が登場し、自己像と考えられるこの妖怪が主人公として旅を始めて行くことになる。回を追うごとに、妖怪は赤いカエルになり、少女へと姿を変え、覚悟を決めて自立に向けての戦いに挑んでいく。ここには背景として母-娘の戦いのテーマがあり、母からの自立が大きな重みをもった心の成長の物語が表現されていたと考えられる。

X+20 年の箱庭や物語においては、フィギュアに投影され主人公として考えられるようなものはない。今回の内的世界の旅は、初回の球体をした砂の塊から、それが開かれ、さらに奥を掻き出していくという砂山の変化や、その中で水が見いだされ、改めて砂・陸とつながっていくような、水の領域や大地の変化で表されている。

また、物語よりも箱庭が優先され、物語は箱庭制作時に感じたことや表現したかったことを意識にとどめる役割が大きく、「おはなし」というより「つぶやき」あるいは「詩」のような印象になっている。また、各回の表題には「私」が入っており、ここでも自分自身の内的世界をストレートに表現していることがうかがわれる。ここに登場する動物は蝶のみである。蝶は魂の象徴とされることもあり(アト・ド・フリース,1984)、蝶に見守られながら内的な世界を旅し、内的世界の様相を表現した「私シリーズ」とも言えるだろう。第 4 回で表現されている「臺(うてな)」への憧れは、これからの自分が向かいたい姿を表している。X 年のような目下の戦いのテーマではなく、また定年退職という節目をくぐって、家族や職業における役割から解放されて、一人の人間として、丸ごとの自分がこれからどのようにありたいか、あろうとするのか、自己実現の方向性が「臺」に表されていると考えると、「自分を生きる」ということが今回のテーマだったと言えるかもしれない。

X 年と X+20 年では箱庭作品も物語も様相が異なるが、通底しているように感じられる点がある。それは火と水である。両方の作品とも火は燃え盛る解放された形というより、ぎゅっと固めて凝縮させた珠のような形で、しかも埋められてあたかも地下にある火として存在している。火はエネルギーや情熱でもあり破壊的な力も持っている(ジャン・シュバリエ他,1996)。ただ、X 年では「真っ赤な珠が息づいて」「その音が聞こえてくる」ようだと自分の中のエネルギーを感じているのに対し、X+20 年では、赤い珠が「脈打ち始めるだろうか」「そもそも炎があるのか」、マグマも「今は感じられないけれど」と察知されにくくなっている。最初の土の塊が開いたところにあった「可愛く見えてしまう」赤い溶岩で自分の中のエネルギーが確認でき、少し落ち着いている状態のように思われる。いずれにしても、火や赤い珠は、コントロールされすぎるほどコントロールされながら、心の奥深くから日々を支えてきたエネルギーの源であったのだろう。

水についても、両シリーズ共に重要なテーマであると思われる。水は無意識を表しているといわれ(アト・ド・フリース,1984)、X 年の作品では、水の存在ははっきりと自覚され、水をめぐる「青の世界」に入ることの必要性を感じ、水の中からヘビに乗って闘いに向かう姿が表現されている。無意識からのメッセージを感知し、無意識の世界の膨大なエネルギーを後ろ盾にしている姿は若々しくもあり純粋な印象でもある。ところが、その 20

年後は、「普段は感じるものがなくなってしまっていた」水を自分の中に見つけることができたという状況になっている。40代から定年退職まで仕事に邁進することでひたすらに現実世界を生き、無意識の世界に開かれにくくなっていた日々は想像に難くない。自分の中の水が枯渇したかのように感じていたことは、ひとりの現代女性が、どこかで生きづらさを抱え、自分を抑えながら生きてきた姿でもあるように思われる。

X+20年の箱庭-物語は、Aさんが20年の歳月の間に失ったかのように思われた火や水を見つけ、取り戻す旅だったのかもしれない。これら火と水については20年という歳月で変化するようなものではなく、人間にとって重要な本質的・潜在的テーマでもあると言えよう。Aさんの箱庭-物語でのテーマではあるが、多くの人間にとって共通しているのではないかと推察される。

火とも関連しているであろう攻撃性・怒りも両シリーズに共通してみられるものである。X年は、箱庭-物語の中では直接表現されていないが、取り組むきっかけや第2回の奥底で火が燃えている山の制作をめぐる感想の中で、職場での怒りの発現や自分の激情への戸惑いが語られている。X+20年では第5回の箱庭に表現され、その物語においても「自分でも持て余してしまう」怒りが直接的に書かれている。対人関係のストレスは日常的にあるものであり、思うに任せない摩擦は年数によって簡単に消せるものではない。X年の頃はその怒りや攻撃性が一つのエネルギー源になりキャリアアップにつながっていく年代であっただろう。そして、20年の歳月を経ることで、混沌とした感情の渦を少しは俯瞰できるようになったり、その中に輝く可能性のある珠に目を向けたりしている。これは、怒りや攻撃性という内的世界の大きなテーマはそれほど変わらず、攻撃性がいつもうまく処理できるようにはならなくても、歳月を経ることや社会生活を送る上での対処の積み重ねによって対応の成熟が図られ、表出のされ方が変化していることを伺わせるものである。このことは、第6回の箱庭において、周りに激しい潮流はありながらその中でも自分の領域を確保し、密やかに花が咲いているという安らぎが得られることに繋がっているのではないだろうか。

両シリーズを通じて箱庭に何かを埋めているということも特徴的である。宝珠や何かの根源と思われるような珠が地中に埋められている。時折はそこにあることを確認するかのように表面に現れてくるけれども、シリーズの最後にはまた埋め戻されている。埋められているのは赤い珠が多いが、火や怒りというだけでなく、存在の核になるような強くもあり他には代えがたい大切なものようである。それがあからこそ、日常的な対応はそれなりに穏やかに時にはクールに行うというようにバランスが保たれてきた可能性もある。「秘すれば花」(注)というフレーズが連想されると同時に埋められた珠が自尊心のようなものにも感じられる。秘めた何かを心に持っていること、見えないところに置かれているからこそ、それが力を発揮したこと、その何かが日々を支えてきたと推察される。それは、意識化されることはなかったかもしれないが、歳月を経ても貫かれているAさんの生き方につながっているように思われる。それは、美意識のように感じられる一方で、埋めることは抑圧とも見ることができ、男女共同参画社会が謳われ、昔に比べれば大きく変化したとみなされるものの、現実にはまだまだ残る女性の生き方の難しさにつながっているようでもある。女性にとって本来の生き方とは外的・内的にどのようなものであるのか、今後も続く重要なテーマといえるのではないだろうか。

2. 箱庭-物語をつくる意義について

Aさんは、X年の制作について「醜い妖怪」の物語であり、課題に「立ち向かう」「覚悟のようなもの」が「心に落ちたように思う」と振り返っている。現実世界では第一線で日々追われるようにして働いていた時でもあり、内的世界では母-娘の葛藤や自立の課題に立ち向かう大仕事もしていたことになる。内的世界からの強い抗議か悲鳴のように時折噴出する怒りや攻撃性も、箱庭-物語に取り組む中で意識化されるようになった。心の中で蠢く課題やテーマに気付いて意識化されることは「覚悟」となって、起こってくるであろう様々なことに、若干なりとも冷静に対処できることにつながったのではないか。発動しようとしていたテーマが大きなものだけに、その意味も大きかったのではないだろうか。

X+20年の制作については、「「終わりに近づいている私」を残したい」気持ちがあったと語っている。一つの職業を定年退職した自分との対話であり、終わりに向かっていくその後の人生をスタートしたタイミングとしては、一人の人間としての集大成のための対話であるとも考えられる。20年の歳月を経た箱庭-物語でも怒りの沸き立ちに手を焼きながらも、自分がなりたいのは優しく揺れる臺(うてな)のような存在であると言葉にしてい

ることは、これからの A さんにとって大切な意味があるように思われる。

年月を経て作品を振り返るとき、箱庭に加えて物語を紡いでおくことは、記憶に残る手掛かりになったと思われる。A さんが「醜い妖怪」を覚えていたように、物語にしておくと思わせるのである。ファンタジーの要素が加えられることが守りにもなって、その時のテーマがそっと意識の中に置かれていくのではないか。「意識の糸でつなぎとめる」(山中,1990)「意識の中での収まり具合が良く」(老松,2003)なることともつながっているだろう。

V. おわりに

20年の歳月を経た二つの箱庭-物語について、変化がみられることや共通していることを見てきた。心にある大きなテーマはそうそう変わることはなくても、歳月を経ることで成熟したり対処の方法が洗練されたりすることで、その現れ方には変化がみられることも分かった。

20年後に制作された箱庭-物語において、混沌の渦の中に珠を見つけていることは興味深い。かなり激しい渦であるにもかかわらず、その中に宝になるかもしれない片を見つけることができるのは、激流の中を生きてきたことで培われた逞しさと強さであるように感じられる。また、シリーズを通して砂で遊びながら砂の造形として表現されていったことは、現実世界での奮闘を一旦終えたこともあって、改めて大地との結びつき、自然とのつながりが重要であるという内的世界からのメッセージを感知したからではないだろうか。

両シリーズの箱庭-物語を検討していく中で、表現されてきたことは個人史ともいえるものであるが、20年の重みを感じるものであり、多くの女性の生き方にも共通するテーマに関わるものでもあるように考えられる。

本研究報告は、中垣、永尾、菅が協議を重ねた上で、次のように執筆を分担し、菅が全体を監修した。I：菅、II・III・IV：中垣、V：永尾

(注)「秘すれば花」は世阿弥「風姿花伝」(例えば、世阿弥編、川瀬校注(1972))による。

引用・参考文献

- アト・ド・フリース(1984). イメージ・シンボル事典、山下主一郎ほか訳、大修館書店、94、678-679
- 東山紘久(1994). 箱庭療法の世界、誠信書房
- 細川佳博・山中康裕編(2017). MSSM への招待 描画法による臨床実践、創元社
- ジャン・シュヴァリエ・アラン・ゲールブラン(1996). 世界シンボル大事典、金光仁三郎ほか訳、大修館書店、804-807
- 河合隼雄(1967). ユング心理学入門、培風館
- 河合俊雄(2023). 夢とこころの古層、創元社
- 木村晴子(1985). 箱庭療法—基礎的研究と実践、創元社
- メイ・サートン(1991). 独り居の日記、みすず書房
- 三木アヤ(1992). 増補・自己への道—箱庭療法による内的訓育—、黎明書房
- 中垣ますみ・永尾彰子・菅佐和子(2022). 箱庭-物語法……見守り手の考察を深める試み(1)、京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要、4、39-48
- 中垣ますみ・永尾彰子・菅佐和子(2023). 箱庭-物語法……見守り手の考察を深める試み(2)、京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要、5、39-48
- 老松克博・三輪美知子・工藤昌孝(2003). 絵画療法 発展 (MSSM—C 法) とその事例、山中康裕 (編著) 表現療法、心理療法プリマース、ミネルヴァ書房、49-65
- 岡田康伸(1993). 箱庭療法の展開、誠信書房
- 表章・小山宏志・佐藤健一郎(2009). 風姿花伝 謡曲名作選、日本の古典を読む 17、小学館
- 坂本龍一・福岡伸一(2023). 音楽と生命、集英社
- 信田さよ子(2008). 母が重くてたまらない 墓守娘の嘆き、春秋社

- SUGA, Sawako(2003). A Report on a Self-Exploration through Sandplay-Drama Method --On Aggression and Mother-Daughter Relationship in a Modern Japanese Woman-- (サンドプレイ・ドラマ法を用いた自己探求の一試みー現代日本女性の攻撃性と母娘関係についてー)、京都大学医療技術短期大学部紀要、23、13-22
- 菅佐和子(2016). 「箱庭・物語法 (サンドプレイ・ドラマ法)」の起源と展開過程を辿る、京都橋大学心理臨床センター紀要 2、25-30
- 菅佐和子編著(2020). 箱庭ものがたり こころの綴りかた教室、木立の文庫
- 菅佐和子・木之下隆夫編著(2001). 学校現場に役立つ臨床心理学、日本評論社
- 豊田園子(2022). 女性なるものをめぐって 深層心理学と女性のこころ、創元社
- 山中康裕(1984). 箱庭療法と絵画療法、佐治守夫他(編)ノイローゼ、現代の精神病理第2版、有斐閣、75-91
- 山中康裕(1990). 絵画療法とイメージ-----MSSM「交互なぐりがき物語統合法」の紹介を兼ねて、水島恵一(編)、現代のエスプリ、275、至文堂、93-103
- 山中康裕(2002). ハリーと千尋世代の子どもたち、朝日出版社
- 世阿弥編、川瀬一馬校注(1972). 花伝書(風姿花伝)・現代語訳付、講談社文庫、163-165